



越谷市この10年間の変遷

平成21年～30年

越谷市出身者の活躍、災害の発生、数十年にわたる事業の完了など、この10年間で越谷には大きな出来事がいくつもありました。ここでは、特に印象的だった出来事を年表から抜粋し、紹介します。

県内2市目の中核市へ移行。 名実ともに県東部地域の中心都市へ



▲市役所1階ロビーで行われた移行式。高橋市長による決意表明の後、くす玉が開披露されました

平成27年4月1日、越谷市は、全国44市目、県内2市目の中核市に移行しました。これにより、福祉や環境、保健衛生、都市計画などの事務や許認可など2024項目の権限が県から市に移り、市の自主的・主体的な判断のもと、従来よりも市民に身近なサービスの提供が可能になりました。

また、越谷市保健所の設置や消防本部の高度救助隊の発足など、市民の安全・安心を守る分野においても新たな施設や組織が誕生。越谷市は県東部地域の中心都市として大きく歩みを進めました。



▲27年4月に開設した越谷市保健所

まちづくりの基本を定めた 条例が制定・施行

平成21年6月、「越谷市自治基本条例」が制定、9月に施行されました。

近年、少子高齢化や市民ニーズの多様化など、社会環境が大きく変化したことで、市民と行政がお互いに協力してまちづくりに取り組むことが求められるようになりました。

自治基本条例は、まちづくりの基本的な考え方や進め方、市民と行政がど



▲多くの市民の参加により自治基本条例が形作られていきました

のように協力すれば良いかを示したもので、市政への市民参加や協働の推進など、今後のまちづくりの規範となるものです。

希少な樹木や草花を集めた 植物園が開園



▲越谷アリタキ植物園の入口

平成22年10月、越谷アリタキ植物園が開園しました。植物学者の故・有瀧龍雄氏が国内外の植物を私有地に集めていたものを、ご遺族が市に寄贈され、植物園として整備したものです。

約9000平方メートルの園内には市の天然記念物「ラクウショウ」や多種のツバキなど、約300種、1200本の植物が植えられ、市民ボランティアの手によって整備されています。

▲23年10月には、野生では絶滅した「コシガヤホシクサ」を特別に展示

▲23年10月には、野生では絶滅した「コシガヤホシクサ」を特別に展示

東日本を襲った巨大地震と津波。

越谷にも大きな影響が出る



▲第1体育館に集められた支援物資

平成23年3月11日、宮城県三陸沖でマグニチュード9.0の地震が発生。太平洋沿岸を襲った津波と合わせ、東日本を中心に多数の死者・行方不明者が出ました。

越谷市内でも、ブロック崩壊などの物損被害や負傷者が発生したほか、電車の運行中止により帰宅困難者が続出。市内に複数開設した避難所に延べ1500人が避難するなど、混乱が起きました。

市では、越谷市社会福祉協議会や、越谷市ボランティア連

絡会をはじめとする多くのボランティアの協力によって集められた支援物資を被災各県へ輸送しました。また、多くのボランティアが、がれきの撤去作業などに向かいました。

地震は直接的な被害を与えただけに留まりませんでした。複数の発電所や設備が被災したことで、電気の安定供給が困難になり、約半月にわたり計画停電が実施されました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって放射性物質が拡散したため、市では公園や学校での放射線量、給食食材などの放射性物質を定期的に計測。また、原発事故により居住が困難となった地域から越谷市にも多くの人が避難するなど、市民の生活にも影響が出ました。



▲計画停電によって消えた信号の下で交通整理する警察官



越谷ツインシティの完成によって様変わりした越谷駅東口

越谷の玄関口が新たな姿に。 市民活動の拠点施設も開設

平成24年9月15日、越谷駅東口に越谷ツインシティがオープンしました。29階建てのAシティと、5階建てのBシティの2棟で構成されるこの施設は、平成2年の再開発推進協議会設立から進められてきた駅東口の再開発事業を象徴するものです。Aシティには住宅と商業施設、Bシティには公共施設と商業施設が整備され、駅前への利便性が大きく向上しました。

再開発事業では駅前広場や周辺道路の整備も行われ、特に駅前広場は2つのロータリーが設置されるなど、整備前の2倍、約7000平方メートルの広さとなりました。

また、越谷ツインシティのオープんに先立ち、24年6月にはBシティ内に市民活動支援センターが開設。



▲市民活動支援センターではさまざまな分野の団体が活動しています

市民活動の拠点としてつくられたこの施設では、市民団体が情報発信や情報交換、市民との交流を図ることができるような設備が整えられ、駅前広場を利用したイベントもたびたび行われるようになりました。このほか、Bシティ内にパスポートセンターと中央図書館が開設され、25年には越谷年金事務所がサシシティから移転しました。



山車と越谷ツインシティ

▲Aシティの前を通る越谷秋まつりの山車。歴史ある神輿や山車と新たなシンボルの越谷ツインシティの対比が印象的です

高齢者の憩いと ふれあいの施設が 市内2カ所にオープン



▲多くの利用者で盛り上がる「ふらっと」おおぶくろ

平成23年10月、蒲生駅前商店街に「ふらっと」がもう、25年10月に大袋商店街に「ふらっと」おおぶくろがオープンしました。この2つの施設は、近年社会問題となっ

いる高齢者の孤立化を防ぎ、生きがいをつくることを目的としており、高齢者が交流するた

め、高齢者が介護保険施設などでボランティア活動を行い、ポイントを貯めることができる仕組みの介護支援ボランティア制度も立ち上がるなど、高齢者が地域でいきいきできる環境が整えられていきました。

また、「ふらっと」がもうオープンと同じ23年10月に、高年齢者が介護保険施設などでボランティア活動を行い、ポイントを貯めることができる仕組みの介護支援ボランティア制度も立ち上がるなど、高齢者が地域でいきいきできる環境が整えられていきました。



▲にぎわう越谷いちごタウン

市は、平成22年度から、J A越谷市と連携し、農業に意欲のある若者が観光農園を営する技術・知識を学ぶ、「都市型農業経営者育成支援事業」をスタートさせました。

23年1月、この事業を推進する場として、農業技術センターの試験用の温室を改装した「越谷いちご観光農園」を開園。毎年、大変なにぎわいを見せています。

27年1月には農業技術センターに隣接する敷地に、全8棟、栽培面積1ヘクタールにも及ぶ大規模観光農園「越谷いちごタウン」が開園。毎年、大変なにぎわいを見せています。

「越谷でイチゴ狩り」の 拠点となる観光農園が開園



世界に誇る親水・環境のまち 越谷レイクタウンが ついに完成



▲大相模調節池を中心に、住宅や商業施設が立ち並んでいます

平成26年、約39・5ヘクタールの大相模調節池が竣工し、越谷レイクタウンが完成しました。

昭和63年、大雨等による被害を防ぐための調節池の建設と、市街地の整備を一体的に行う「レイクタウン整備事業」が国の新規施策として設けられました。その後、平成11年に都市基盤整備公団（現UR都市機構）によって土地区画整理事業が始められ、長期にわたってまちづくりが進められました。

越谷レイクタウンは、20年4月

にまちびらきを行って以降、次々と住宅や商業施設などが建てられ、1万7000人以上（30年8月時点）が住む大きなまちとなりました。休日になると、公園などで遊ぶ家族連れや、イオンレイクタウンを訪れる人などにぎわいます。

一方で、池のほとりにはハンザディンギー（小型ヨット）やカヌーなどで遊べる施設ができ、北西部には水辺の動植物が自然のままに生息する区画が設けられるなど、人と自然が共に生きていくことができるまちでもあります。21年、国際的な表彰「リブコムアワード」のプロジェクト賞で、日本で初めて金賞を受賞。28年には都市景観大賞で都市空間部門の大賞（国土交通大臣賞）に選ばれました。



▲風の手で進むハンザディンギー。後ろは水辺のまちづくり館

越谷を突然襲った竜巻と大雨。 市民の生活に大きな被害



▲竜巻で大きな被害を受けた大杉橋付近の住宅地



▲被災家屋から家財道具を運び出すボランティア

平成25年9月、さいたま市から茨城県坂東市へと抜ける巨大な竜巻が発生。越谷市でも北部の大杉、船渡、砂原などを中心に、重軽傷者合わせて75人、被災世帯数1668という非常に大きな被害を受けました。翌日には気象庁が竜巻の規模をF2（風速が約7秒間の平均で秒速50〜69メートル）と推定。公共施設も被災し、特に、調理器具が破損した第二学校給食センターは、業務を再開するまで半年以上を要しました。

すべて閉鎖されるまでに、延べ268人が身を寄せました。また、自宅などが被災した住民のためにブルーシート約9000枚、土のう袋約1万9000枚などが配布され、屋根や壁の応急処置、がれきの撤去などを行う様子があちらこちらで見られました。

一方で市民による支援の輪が広がり、連合婦人会や自治会による炊き出しが行われたほか、延べ約2000人のボランティアが被災家屋の清掃やがれきの撤去、家財の搬出などの支援を行いました。また、全国から約4600万円の義援金が集まり、被災者へと送られました。27年9月には台風18号の影響による記録的な大雨で、関東北部に大きな被害が発生。越谷市では1時間当たり40ミリを超える雨量を観測しました。



▲大雨で冠水したせんげん台駅東口

これにより、東武スカイツリーラインせんげん台駅東口をはじめ市内各所で道路が冠水したほか、46カ所で道路が通行止めとなりました。建物の被害も多く、桜井、新方の増林地区を中心に、住宅等668件の床上・床下浸水被害が発生しました。また、鉄道の運転見合わせや学校の休校も相次ぎました。

近年まれに見る2つの災害の発生によって、日頃の備えがいかに重要であるかが再認識されました。



▲越谷ナンバーを付けた車に笑顔の高橋市長

「越谷」の名が全国を走る。 ガーヤちゃんのデザインが入った ナンバープレートも制作

平成26年11月、越谷駅東口駅前広場で、越谷ナンバー出発式が開催されました。

それまで、越谷市で新たに登録された自動車には春日部ナンバーが付けられていましたが、25年に国が募集した地域の活性化や知名度の向上を目的とした、いわゆる「ご当地ナンバー」（第2弾）に、中核市への移行を控え、市の魅力発信を目指していた越谷市が応募し、越谷ナンバー導入が実現しました。

事前の市民アンケートでも約8割が導入に賛成。ふるさと越谷の発展のため、市民も力強く

後押ししました。



◀自動車用越谷版図柄入りナンバープレート

▶原付バイクオリジナルナンバープレート



また、27年4月には中核市移行を記念して、原付バイクのオリジナルナンバープレートの交付を開始。しらかばと橋を背景に羽ばたく越谷特別市民ガーヤちゃんのデザインが人気となりました。

さらに30年5月には、自動車用の越谷版図柄入りナンバープレートのデザインにもガーヤちゃんのデザインが採用されることが決定。10月から交付が始まり、「越谷」の名称とガーヤちゃんが全国を駆け巡ることとなりました。

水郷こしがやを象徴する 親水施設と越谷の観光物産 拠点施設が完成

平成23年度から27年度にかけて、市役所東側の葛西用水沿いに葛西用水ウッドデッキが整備され、越谷の豊かな水辺を生かした新たなにぎわいと憩いの場となりました。また、ウッドデッキの整備にあわせ、用水内に飛び石等も設置されました。用水の水位が下がる秋や冬を含め、1年を通して水辺に親しむことができるスポットです。

市民に親しまれています。

29年5月には、越谷駅東口に新たな観光物産拠点施設「ガーヤちゃんの蔵屋敷」がオープン。日光街道の宿場町の歴史を持つ越谷らしさのある、蔵をイメージした外観の建物が特徴的です。

店内では、越谷の名産品や伝統的手工芸品の販売、せんべいの手焼き体験やだるまの絵付け体験、パンフレットや鉄道ジオラマでの市内観光スポットの案内などを行っています。越谷の魅力を市内外へ発信する施設として注目されています。



▲特徴的な外観に、思わず中をのぞいてみたくなる「ガーヤちゃんの蔵屋敷」



▲川面を抜ける風を感じられる散歩コースとしても人気の「葛西用水ウッドデッキ」

越谷ゆかりの3選手がオリンピックで活躍。 市民も声をからして応援



▶市民荣誉賞受賞式で、獲得した2つのメダルを披露する星さん(平成28年9月)。リオ大会後に現役を引退し、各地での講演やテレビ・イベントへの出演などで水泳の普及に努めている

平成24年のロンドンと

28年のリオデジャネイロ。この2つの大会に、越谷市から3人の選手が出場しました。

1人は競泳の星奈津美さん。20年の北京大会から3大会連続出場を果たし、ロンドン大会とリオ大会では、ともに200メートルバタフライで銅メダルを獲得。リオ大会後にはそのす

ばらしい功績をたたえ、第1号となる越谷市民荣誉賞が贈られました。

もう1人がアーティスティックスイミング(当時はシンクロナイズドスイミングと呼称)の足立夢実さん。ロンドン大会でチーム競技に出場し、5位入賞の立役者となりました。

最後の1人が陸上の杉町マハウさん。8歳で来日し、祖



▲華麗な演技を見せる足立さん(平成30年)。現在はアーティスティックスイミングのミックス(男女混合)デュエット日本代表として世界に挑んでいる

市内で初の パブリックビューイングも 開催

リオ大会では星さんを応援しようと、イオンレイクタウンのイオンホールで、200メートルバタフライ準決勝・決勝のパブリックビューイングが行われました。メダルの期待がかかる決勝には、星さんの家族や友人、高橋市長ら350人が応援に駆けつけました。銅メダル獲得の瞬間には、会場は大歓声に包まれ、健闘をたたえました。

国ブラジルの代表としてリオ大会に出場(北京大会以来2度目)。400メートルハードルで準決勝進出を果たしました。

越谷そして国の期待を背に躍動する3選手を、市民は声をからして応援し、競技終了後には惜しめない拍手を送りました。



▲リオ大会へ向け、しらこぼと陸上競技場で練習に励む杉町さん(平成28年)。大会後も、400メートルハードルを専門に、さらなる活躍を目指し日々奮闘する

越谷の歴史で初の快挙。 越谷市民からノーベル賞受賞者が誕生



平成27年10月、越谷市民で東京大学宇宙線研究所長の梶田隆章さんのノーベル物理学賞受賞が決定しました。
梶田さんは、観測装置「スーパーカミオカンデ」で素粒子「ニュートリノ」を調査し、ニュートリノ振動という現象から、ニュートリノに質量があることを発見。素粒子理論の定説を覆す研究成果が高く評価され、ノーベル物理学賞の受賞に至りました。

市ではこの偉業をたたえ、梶田さんを越谷市名誉市民に推薦。27年12月の定例市議会
で、秋山長作元教育長（故人）以来5人目の名誉市民となる
ことが決定されました。名誉市民の決定は、昭和57年以来、33年ぶりの出来事でした。
越谷市から初となるノーベル賞受賞者が輩出されたことは、市民に大きな驚きをもって受け止められ、28年2月にサンシティ大ホールで開催された名誉市民称号贈呈式・記念講演会にも多くの注目が集まりました。市内の小中高生をはじめ約1600人の来場者でホールは満員となりました。



▲記念講演会で「広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備を」とメッセージを発した梶田さん



▲講演「ニュートリノのなぞに挑む」に聞き入る満員の聴衆



▲代表で質問した小中高生と笑顔で記念写真に応じる梶田さん